

「今、私の晴雨計は！③」

「北スペインの街で！」 3

平山征夫

北スペインではもう一つ本当に小さな村を訪ねた。「ゲタリア」という人口三千人弱の海辺の漁村で、一時間も歩けば町の殆どを知ることが出来る。フランス国境に近いサンセバスチャンから路線バスで国境とは逆方向に五〇分海沿いを走れば到着だ。注意していないと乗り過ごしそうな変哲もないバス停で降りると、バス道路から海に向かって二本の道路が縦に走っているだけだ。そんな小さな村だが、何度もスペインとフランスの争いの戦場となった歴史を刻んでいる。この街を

訪れたのは、もちろん魚など海の幸の炭火焼き料理を味わおうというもの。

街に相応しい小さな教会の脇のトンネルを抜けるともう海だ。色とりどりの漁船が停泊している港を見下ろす少し高台にあるレストランは、同じ目的の観光客でにぎわっていたが、幸い外の良い場所に席を占めたわが家族は、メルルーサなどの魚や海老、貝、イカ・タコなど炭火で焼いた海産物を堪能した後、おまけに肉の炭火焼きも味わった。満足感に浸り満腹の余韻を味わいながら、海を見下ろすレストランの野外テーブルでそよ風を感じつつしばらくぼーっと至福の時を過ごした。そしてゆったりと

流れる時間を楽しみながら、道を戻ると途中で土産屋さんがあったので覗いてみた。手作りの海に因んだ置物を売っていた。この街を思い出させてくれそうな灯台の置物を買った。するとそれを目ざとく見つけた妻が予想通り「また何か買ったの？」と聞いてきた。「うん！ちょっとしたものね」といつもの通り答える。私は昔から海外旅行に出かけると、旅行先で民芸品など小物のお土産を買うのを楽しみにしている。それが積み積もって私の部屋の書棚等のスペースにかなりの数並んでいる。冷蔵庫にも同じように買って来たマグネットが溢れている。時々眺めるが、どれも旅を思い出させてく

れる大事な小物だ。赤白の縦じまのパンツのムーミンや、シルクロードのイスラム商人の人形など中には現地だから手に入つたという珍しい物やしゃれた物もあるが、まったく民芸品などに興味のない妻には単なる“ガラクタ”にしか見えないようだ。だから気のせいかさっきのような会話になると私を見る目は“ハムスター”を見ているような感じだ。どうかと思いつながら出かけたゲタリアが魚料理だけでなく、アイスクリームも美味しかったし、記念の灯台の置物もよかつたし、何よりこんなゆつたりした時間の経過の中で過ごせて大満足だった。もし、スペインの

バスク地方に出かけるなら、
“ゲタリア”をお忘れなく！

はじめに約束したように今回の旅のフライト中に見たある映画の話がこの旅行記の最後にしたい。

先述のように機内で沢山の映画を見たが、アカデミー賞の評価結果と異なり私が一番良いと思ったのは「ライオン」二十五年目のただいま」という作品だった。タイトルからある程度想像できるが、五歳の時親からはぐれたインドの貧しい少年が、オーストラリアの夫婦の養子になって何不自由なく育てられたが、二十五年後の三十歳の時、グーグルアースでかすかに残る少年時代過ごした街の記憶から

自分の出身地を探し出し、実の親に再会するという実話を映画化したものだ。

二十五年振りの実母との再会の感動もさることながら、二十五年の歳月と一万キロの距離を超えて自分の家の通りを探し出すグーグルアースの機能のすごさも驚いた。オーストラリア人の女優ニコール・キッドマンが映画でオーストラリア人養母役をやり助演女優賞にノミネートされたのも話題になったが、私がこの映画に深く印象づけられたのは、彼女の次のセリフだった。「私は世界に沢山の親のいない子供たちがいることを知り、結婚して自分の子供を産み育てるのではなく、こうした子供たちの養父母とな

ることにしました。そして同じ者の人を捜し結婚したのです・・・」。

結婚してもなかなか子供が出来なくてそれで養子と言うのが通常だと思っていた私には、このセリフは「え！」という驚きを与えました。

裕福な環境の夫婦が初めから貧困の子供たちのために、自分たちの子供をつくらず養子をするという考えは、日本人社会にはどのくらいあるだろうか。極めて少ないだろう。この映画の夫婦は、もう一人同じインドの子供（インドの子供二人と言うのは英国とインドの関係だろうか？）を養子にしている。日本では里親のなり手がなかなか見つからない。

宗教上の考えの違いと言う人もいるが、戦後空襲等で身寄りを失った浮浪児をお寺が沢山預かっていたじゃないか・・・。映画を観た後色々考えさせられた。併せて主人公サル・ブライアリーの少年時代を演じたサニー・パウエルに助演男優賞を挙げたかった（とてもチャーミングだった）なという想いも残った。

この映画のタイトルが「ライオン」となっていることについては、映画の一番最後に触れられる。ここで明かすのはこれからこの映画を観る人のために止めておこう。

（平成二十九年七月五日）